
時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

琅來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と宇宙^{そら}を超えて〜分割版〜

【Nコード】

N7986X

【作者名】

琅來

【あらすじ】

こちらは分割版となります。

長編版 ↓ <http://ncode.syosetu.com/n0697p/>

身分が物を言う世界——そこは、今から千年後の、宇宙進出をも果たした、遠い遠い未来だった。そこには、二人の少女がいた。彼女達は身分が違いながらも、仲のよい親友だった。けれど、中学一年生の夏休みから、二人は運命の渦に翻弄されることになる。そうし

て知った、衝撃の事実とは――。

序章「総ての始まり」(前書き)

この話は基本的に友情物ですが、話の都合上恋愛も入ってきます。
また、途中で近親相姦も入ってくるので、苦手な方はご注意下さい。

序章「総ての始まり」

「嗚呼。この子は……この子はあの時に、産まれて来てしまったのですわね。せめて……せめて、もう少し遅ければ……」

「そのことは、言うな。今は、産まれたてのこの子供に、名を付けなければな」

「それは、考えがあります」

「どのような名だ？」

「はい。それは、今この国にはない、富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実った果実を、単なる食糧として感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心を願って、——と名付けましょう。この子が——になった時の繁栄を願い」

「ああ。それはいい。美しい名だ」

「ところで……」

そう言つと、美しいその女性は、一息置いてから、隣の男性に話しかけた。

「この子は、やはり、あちらへ……？」

「その時は、お前の名をつけよう……きつと」

「あの……この子に、弟か妹が産まれたら……そして、信頼でき、決して裏切らないような子供がいた時は、その時にはこの子が——と言つて、いいですわよね？　いくらあんな人でも、まだそのような酷いことをやろうとは思わないでしょうから」

「ああ。我らはいつまでもいられるとは、限らんのだからな……」

この二人の間に、なんとも淋しそうな空気が流れた……。

「まあ、なんて可愛い子なんでしょう。ぴったりの名前は何かしら？」

「そうだなあ。そうだ。古い言葉で、『鶴は千年 亀は万年』と言うではないか。だから、鶴はどうだ？」

「そんな名前は嫌よ。なんて言っただって、この——に相應しい名でない、絶対にからかわれるはずだわ。それに、古風すぎるわよ。絶対に、断固として拒否します」

「しかし、縁起がいいと言うと……」

「じゃあ、この——を取って、私が好きな音で響きのいい、『——』という音をつけましょう。そして、この『——』の漢字は、このように」

女性はそう言うと、手元にあつたパネルに一つの漢字を書いた。

「そう、そしてこの二つをくっ付けて、——にしましょう！ 貴方、反対、しないでしょね？」

「も、勿論だ！ 反対する訳がない！ ……それに、響きのいい名だしな」

「ええ。本当に……本当に、可愛い子。大きくなった時、どんな子でもいいわ。この子に合う友達が、沢山できるといいわね……」

「ああ……そうだな……」

先程の二人とは実に対称的に、何とも暖かく、優しい想いが満ち溢れた……。

第一章「日記帳」――1

ここは、今からおよそ千と数百年後の、西暦三二四八年、全宇宙共通暦一三二一年の世界。

西暦二七〇〇年頃、地球は他の遠く離れた星から発見されたことを告げられ、しかも文明がこちらの方が大分遅れていることに気付かされ、大混乱に陥った。

だが、ここではもうそんなことは遠く昔の過去の出来事となり、地球は地球連邦となり、日本国はただの日本州となつて、みんなが全宇宙共通語を話す時代となつた。

ここはそんな日本州の、とある街にある公園だ。

季節は夏真っ盛りで、夏休みである。

「由梨亜^{ゆりあ}！ お待たせっ！」

「あら、遅かつたじゃないの、千紗^{ちさ}。呼び出したのはそつちのくせに」

声を掛けられた少女――由梨亜は、背中の中程まで届く、柔らかく波打った茶色の髪を一つにまとめている、緑がかった黒の瞳の美少女で、声を掛けた少女――千紗は、肩甲骨辺りまでの、長くもなく短くもない長さで、墨を流したかのような、柔らかく光る真っ直ぐな黒髪を一つにまとめ、瞳の色は髪よりは茶色い色をしている。

それだけならいいのだが、今の地球連邦の常識で考えると、この光景は可笑しく見える。

何故なら、由梨亜はいかにもお嬢様に見えるのに対し、千紗は普通の少女なのだ。

もしもここに常識のある、普通の人がいたら、首を捻ったはずである。

何故ならこの地球連邦は身分社会で、大きな会社を経営し、しかも慈善団体などに寄付するお金を惜しまない、何十代も続く家を貴族と呼び、いくら稼いでも、寄付するお金を惜しむ家や、まだ成つ

て間もない成り上りは富豪と呼ばれ、それ以外の人は庶民と呼ばれる。

また、商売をしていても、老舗と呼ばれるような昔から経営しているお店でも、支店がなかったり、少なかったり、手を付けている仕事の幅が狭かったりすると、いくらお金を稼いでも、寄付しても、ぎりぎり富豪には認められるかもしれないが、貴族として認められない。

そして、この由梨亜は正真正銘大貴族のお嬢様で、千紗は正真正銘の、親戚のどこを捜しても富豪や貴族がない、立派と言ってもいいほど立派な庶民なのだ。

しかし、この二人は敬語を使わず、しかも相手の名前すら呼び捨てで普通に通している。

なので、珍しくはあるが、二人は身分を越えて友達になったと考えるのが妥当である。

「あのね、由梨亜。さっき先輩から連絡あつて、あたし達も百不思議に挑戦しろって！」

そう……七不思議ではない。

百不思議である。

この二人の通っている学校はかなりの曰く付きで、そう言った怪談物が数限りなくあるのだった。

「本当！ 千紗？」

「勿論！ それで内容は、夕方頃に学校の使われてない備品室に行くことだって。それで、怪談によれば、そこには、昔自殺した女の子が遺書につて遺したノートが、逢魔ヶ時になると現れるんだって。それを見つるってというのが、あたし達が挑戦することだってさ」

この二人の会話で大体分かったかも知れないが、二人の所属している部活は、『心霊研究部』という部活である。

だが、その名前の響きとは違い、普段のこの部活は、科学的な根拠を元に心霊現象を説明していくという、至って科学的な部活である。

この二人は、その部活の一年生だ。

だが、年に一度——三年生が引退してしばらく経った夏休みに、何故か一年生が、この学校の百不思議の中から一つを挑戦するという慣習がある。

そしてこの二人も、その順番が回ってきたということだ。

「それで、時間は？」

「今週の水曜日、夜の六時だって。先生もいって言ってたよ」

「ってことは、先生からも許可を得ているんだ」

「当たり前でしょ？ あたしはともかく、先輩がそんな手抜きするはずないよ」

……自分で分かって言っている所が、特に問題な発言であった。

「まあ、そりゃそうよね……それで、場所は？」

「旧校舎三階の北端の、さっきも言ったと思うけど、備品室。けど、今は使われてないから、埃に気を付けないとね」

「ええ。ねえ千紗、今日暇？ 時間あるのなら、うちで遊ばない？」

「うん、いいよ！」

この二人の名前は、本条由梨亜ほんじょうと彩音千紗さいいん。

二人は、とても仲の良い親友だ。

しかし、二人はこの後に起こることを知らなかった。

知っていれば、断るに違いなかった、恐ろしいことを。

丁度、明日初めての任務に挑戦するという、火曜日のことだった。

「千紗」

「何？ 由梨亜？ 明日の確認？」

「違うの。あのね、千紗。明日……行かない方がいいよ」

「どうしてっ！」

「千紗、煩い。ちょっと黙って」

由梨亜は大声を出した千紗に注意をしてから言った。

「あのね、私の曾お祖母様は、この学校に通っていらしたらしいの。曾お祖母様は、本家から外れてたから。それで、私が明日、これに挑戦するっていうことを聞いて、注意して下さったの。曾お祖母様はこの、私達が試そうとしているこの怪談で、危険な目に会ったんだって。だから、この怪談は、飛ばされたんだって」

「何それ。由梨亜。それ、ほんとに信じてんの？」

「えっ？」

由梨亜は、きょとした表情で言った。

「あのさ、それって、どの曾お祖母さん？」

「……えーっと、お母様の、お母様の、お母様に当たる曾お祖母様よ」

由梨亜は、指を折って数えた。

「……その人ってさ、前、あたしが由梨亜の家に遊びに行った時に、私立の超頭がいいので有名な幼稚園から大学までの一貫校出身で、その中でも常にトップクラスだったって、あたしにすごい自慢してた人だよね？」

「……………」

由梨亜は、言葉が出なかった。

「これはあたしの想像だけどさ……多分、由梨亜の曾お祖母さん、由梨亜を心配して言っただけで、何にも根拠はないと思うよ……………」

千紗が恐る恐る言った言葉に、由梨亜は頭を抱えてしまった。

全く否定できないだけに、とても痛い。

「うん……多分、そうかも……………」

「じゃ、明日、予定通りにね？」

「……うん。ごめん…………千紗」

「いいって。ほら、行こ？」

「うん……………」

由梨亜は半ば脱力したまま、千紗と共に歩いて行った。

そして、その夜が来た。

「千紗〜！」

「遅い！　今まで何やってたの！？」

「えっ……。だって千紗。今、五時四十分だよ？　五時五十分集合
って言うてなかったっけ？」

「え……。アハッ」

「もう。ボケないでよ」

由梨亜が頬を膨らませて言った言葉に、千紗は笑いながら答えた。

「じゃあ行こっか」

「うん！」

「うつわ〜！　こんなに薄暗くって人氣もない学校って怖いね〜由梨亜。何だか気味悪いし……。ねっ、由梨亜。あたしはこんなこと
するの初めてだけど。由梨亜はある？　あっ、そうだ、そういえば、
この中にあるノートって……」

「千紗！」

「はい！」

千紗は、思わず背筋を伸ばして答えてしまった。

……。ちなみにその叱責は、正直言っただけで今まで聞いたどの先生や親
からの叱責よりも迫力があり、逆らいがたい物であった。

「煩い！　ちよつとは静かにしたらっ？　ほんとと言うと、私、怖い
んだから……。ちよつとただけだね」

「ふ〜ん……。ちよつと、意外かも……」

「いいから、さっさと行くわよ！」

「は〜い……」

二人は、薄暗い廊下を歩いて行った……。

「由梨亜、着いたよ」

「ええ」

「それじゃあ、行くよ!」

ガラツ、という音を立てて千紗と由梨亜が戸を開けると、使われていない机の上に、何かが一瞬ピカツと光った。

光は一瞬にして消えたが、千紗は構わずにその机へと歩き出した。

「ちょ……待ってよ! 千紗!」

呆気にとられていた由梨亜が、我に返って千紗を追いかけた。

千紗は追って来た由梨亜を従え、その光った場所へ行ったが、光った机の上に置いてあった物を見るなり、息を呑んだ。

「……ほんとに、ノートがあつた……」

「千紗……でも……でも、さ。これ……もしかしたら、先輩の悪戯かもよ……?」

「うん……でも、悪戯にしてはちょっと悪質じゃない?」

「うん……まあ、悪質って言えば、悪質だろうけど……ちょっとした、ドッキリかもね」

……既に、二人の中では『先輩の悪戯』と確定されてしまっている。

「うん……じゃあさ、これ、先輩に報告した方がいいよね?」

千紗は携帯端末という、地球連邦内ならどこでも繋がり、希望すれば立体映像にできる優れ物であり、大抵はみんな持っている物を取り出して言った。

「じゃ、あたしが柑奈先輩に電話掛けるね?」

「ええ。私って、こういうの持っていないもんねえ……」

由梨亜の溜息じみた言葉に、千紗はにやつと笑った。

「こういう時、お嬢様って不便だねえ」

「もっつ! いいから、さっさと先輩に連絡取ったら?」

「はいはい」

千紗は、すぐに柑奈に電話を掛けた。

その時、柑奈は苛々と携帯端末を手に取ったり置いたりと繰り返していた。

と、その時、いきなりコール音が鳴り、ぱつと携帯端末を手に取った。

「もしもし？」

『もしもし、柑奈先輩ですか？ あたしです。千紗です』

柑奈は、それまでの苛々とした様子を消し、手をぽんと打った。

「千紗？ …… ああ、そういえば今日だったね。 …… それで、どうだった？ 何か、見付かった？」

柑奈の悪戯っぽい言葉に、千紗が映像に映るように、一冊のノート掲げた。

『はい。こんなノートが置いてありました』

「へえ。こんなのがねえ。中身、見てみた？」

『あ、いえ…… まだです』

「じゃあ、見てみなさいよ」

『はい……』

柑奈は、しきりと千紗を急かした。

そのノートをパラパラと捲っていた千紗は、少し怪訝そうな顔になった。

「ん？ どうした？ 千紗」

『あの…… これ、普通のノートじゃないんですけど……』

「どんななの？」

『え…… と、何て言うか……』

『日記帳に見えますね……』

横から、由梨亜が顔を出して言った。

「ふ…… じゃ、しばらく二人でそれやっというて」

『はっ？』

『はいっ？』

二人は、揃って驚いたような顔になった。

『え〜っと……これを、ですか？』

「うん。そう。二人で交互にやっというて？ 一人だったらずっと一人でやればいいだろうけど、二人だからね。だったら、二人で交互にやったらいいんじゃないの？ あ、でも、後で見せて貰うことになるかも知れないから、見せられない内容は書かないこと。いい？」

『はい、先輩』

「それじゃあ、明日ね」

『はい。さようなら、先輩』

千紗と由梨亜はそう返事をする、端末を切った。

柑奈はしばらく端末を手に考え込んでいたが、一つの番号を押した。

短いコール音の後に、柑奈と歳が変わらない少女が出る。

『もしもし……柑奈？ もしかして、千紗と由梨亜から連絡来たの？』

「うん。見事に引つ掛かってくれたわよお」

柑奈は、につこりと微笑んと言った。

そう、これは毎年恒例の肝試し——というか、悪戯なのである。

『じゃあ、どうする？ 千紗と由梨亜で一年は全員終わったけど……ネタばらし、いつやる？』

「う〜ん……じゃあ、九月入ってからにしょ？ あんま早過ぎても、興醒めでしょ」

『じゃあ、また明日ね、部長さん』

「はいはい、明日絶対遅れないですよ？ 副部長さん」

二人はそう冗談のような口調で言つと、それぞれ端末を切った。

「じゃあ、先輩はああ言ってたけど、順番どうする？」

二人は学校から帰りながら、会話を交わしていた。

「ん〜、じゃ、由梨亜からでいいよ」

「ええ。分かったわ。じゃあ鈴南すずなが早く帰ってって言ってたから、急ぐわね」

鈴南とは、由梨亜付きの召し使いである。

けれど、その鈴南にしても、実は貴族階級のお嬢様であり、千紗よりも身分が高い。

そんな人間を複数人使用人として抱えている由梨亜は、それこそ真正正銘のお嬢様なのであった。

「うん。じゃ〜ね」

「じゃ〜ね〜！」

「あの由梨亜は、どんなことを書くのかなあ……」

由梨亜が去っていくと千紗は独り言を漏らし、そして角を曲がり、自宅へと帰って行った。

由梨亜は、屋敷の扉を潜ると、声を掛けた。

「ただ今戻りました」

すると、すぐに鈴南が出て来る。

どうやら、由梨亜が帰るだろう時間を待っていたようだ。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

鈴南が頭を下げると、その後ろから、由梨亜の母が顔を覗かせた。

「あら、お帰りなさい。由梨亜」

「ただいま。お母様、鈴南」

「それでは奥方様、お嬢様。こちらへ。夕ご飯のお支度が整っております」

「ええ、鈴南」

第一章「日記帳」―2

「お帰りなさい！ お父様！」

その日の翌日、本条家の広い屋敷に、由梨亜の元気な声が響いた。
「ただいま、由梨亜。お前の誕生日の前までに、シャリート国から帰れて良かったよ」

由梨亜の誕生日は、八月十六日。

そして、何の偶然か、千紗も同じ誕生日だった。

今は、八月十四日だ。

「ところで由梨亜、明日は部活あるかい？」

「いいえ。夏休みは木曜の午前中だけなの。明日は金曜だから空いているわ」

「それでは明日、十八日にするお前の初めてのパーティーの為に、ドレスを買って来ようか？」

「ええ。それでは私、着替えて来ます」

由梨亜は部活から帰って間もなく父親——本条耀（よう）太を迎えたので、制服のままだった。

由梨亜は階段を駆け上がって部屋に駆け込むと、溜息を一つ吐いた。

「ふう〜」

（良かったあ。怪しまれなかった。お父様もお母様も鈴南も頭固いから、もしも見られたら大変なことになっちゃうわ。早速書こう！）

由梨亜はしばらく日記に何かを書いていたが、五分後、書き終えたのかその手を止めた。

「できた〜！」

（これ、明日……は無理だから、明後日渡そう！ あっそうだ！
千紗に、その時一緒に招待状渡そう！ 私のパーティーに。ついでに、部活の人全員に、都合がつくなら招待状送ろうかな。ああ、楽しみっ！）

由梨亜が楽しげに心を弾ませていると、コンコン、という音がして、外から鈴南の声がした。

「お嬢様、お食事の時間にございます」

「ええ。今行くわ」

その翌日、由梨亜は耀太や母親の本条瑠璃^{るり}、他に荷物を運ぶ為と、運転の為に、車の盗難防止の為に車に残ってもらう為に連れてきた召し使い達と共に、本条紳士淑女高級店という、本条家が開いている店の本店に、わざわざ四十分も掛けて行った。

交通網が発達している今、四十分も掛けた移動というのは大事である。

本来なら屋敷に運び込んでもいいのだが、あまりにも品揃えが豊富だった為、それもできず、またいい物が揃っているのはやはり本店なので、時間を掛けることにしたのだった。

店に入ると、由梨亜は少し甘えるように言った。

会えない時は、一ヶ月以上も会えない相手でもあるので、自然とそうなってくるのだ。

「お父様。私、ドレスとか靴とか、青や白で統一したいわ」

「ああ。いいとも」

「あつ、このドレス可愛い！ 綺麗な色。この色も綺麗ね。ああ、迷ってしまうわ」

「由梨亜。どんなに迷ってもいいから、お前の気に入る物を買いなさい」

「はい、お父様」

結局由梨亜が買ったのは、裾が南国の海の海底が一段と深くなっ

た所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーシヨンの長袖で膝下丈の、今時珍しい——つまり、かなり高価な——本物の絹でできたドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメル靴、群青色の毛系のポンポンのような物を真つ白なレースでくるんだ髪留めだった。

「由梨亜。これでいいのか？ 他に買わなくて」

「ええ。だって、これと言えるアクセサリーが見つからなかったんですもの」

由梨亜は少し唇を尖らせると、すぐに笑顔になり、言った。

「でも、ドレスとか靴とか、気に入った物があつて良かったわ」

「そうだな」

その時、由梨亜は確かに何かの視線を感じたが、振り返ると、何もなかった。

（まただわ。また、何もない……この前も、その前も、そして今も、確かに誰かからの視線を感じたのに……）

「どうした？ 由梨亜」

「いいえ。何でもないわ」

「さあ、お乗り下さいませ。旦那様、奥様、お嬢様」

チャイムが鳴り、千紗がドアを開けると、そこには珍しいことに由梨亜の姿があつた。

「由梨亜！ 来てくれたんだあ。上がって」

「お邪魔します」

「一々言わなくても別にいいって！ ほらほら」

由梨亜は千紗に急ぎ立てられ、玄関を上がった。

「はい」

コトン、と千紗は、二人の前にお菓子の入った器とジュースを置いて、話しかけた。

「それで、どうしたの？ 由梨亜がうちに来るのって、珍しいよね？ って言うか、一年振りぐらいじゃない」

千紗は由梨亜に、単刀直入に訊いた。

「あ、うん。そうだね。はい、日記帳。うちだと、鈴南達の目が厳しくて渡せないの」

由梨亜はそう肩を竦めて言うと、千紗に手渡した。

「ありがと、由梨亜。じゃ、あたしが書き終わった後も、由梨亜に来て貰うか部活の時の方がいいね」

「ええ、そうね。あと、私の初めてやる誕生日パーティーの招待状。他にも、都合つく部員の人も招待するつもりよ」

「へえ。あっそうだ！ 由梨亜、あたし、由梨亜に今プレゼント作っている途中なんだ。楽しみに待っててよね？」

「へ。何作ってるの？」

「ブレスレットと、あとネックレス！」

「ふん。何色？」

「白とか、水色とか、青とかを組み合わせているの」

「そうなんだ。偶然だね。私も、千紗に薄いピンクや赤紫とかの、ブレスレットとネックレスを作っている最中なの。ちょっとびっくりだわ」

「じゃあ、交換するみたいだね！」

「そうだねえ」

由梨亜は、日記帳の存在を知られずに千紗に渡せたことをとても喜んでいた。

そして、次に回って来た時も、上手く出し抜けられるようにと祈った。

「それは……それは、どういうことだ。由梨亜！」

耀太の、怒りが燃え上がり、もう手が付けられない状況に陥った

罵声が、屋敷を揺るがすが如く響いた。

だが、由梨亜はそれに全く動じず、困惑したかのように、たった今言っただけの事を言った。

「何って……ただ、友達や先輩方を、私の誕生日パーティーに誘いたいって、言っただけじゃないの。これの、どこがいけないの？」

由梨亜が至つて不思議そうに言った為、耀太も怒りを少し抑え、こう言った。

「いけないも何も、大量の庶民を屋敷に招待するなぞ、前代未聞の珍事だぞ。過去には庶民の友人を招いたこともあったから、千紗はいい。しかし、その他の者を招いたことなど前例がない。いくら年上とはいえ、身分を考えればお前の方が上なんだぞ。本来ならば貴族であるお前が敬語を使われる立場であり、庶民に敬語を遣うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけ」

「……はい」

「分かったのならよい。しかし、部活部活と浮かれて勉強をサボるような真似はならぬ。鈴南、由梨亜に家庭教師が来る時間だ。先生をお迎えしろ」

「はい。畏まりました。お嬢様、お勉強のご用意を」

「分かっているわよ。鈴南」

「それでは由梨亜、先に行け。私は鈴南に話があるからな」

「はい、分かりました。それでは失礼します。お父様」

由梨亜が出て行くと、耀太は声を潜めて言った。

「鈴南」

「何でしょうか」

「由梨亜は、何故あのようになってしまったのだろう」

鈴南は額に皺を寄せ、難しい顔で黙ったかと思うと、小さな声で慎重に言った。

「お部屋にいる時や学校にいる時は、人権侵害に触れる為、監視は不可能です。ですが、その他の時……本条家の者が付き添わずに外出する時は、身の危険を回避する為という名目を持って、なるべく

目を離さぬように、召し使い達に手を回しておきます」

「さすが鈴南。そういう所もしっかりしている」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。それでは、先生を迎えます」

鈴南が出て行くと、耀太は半眼を伏せた。

（鈴南に任せたから、大丈夫だと思うがな……）

「こちらも、手を回しておくか。用心はいくつ重ねても足りる物でもないし。私の可愛い由梨亜の為なら、害になる物全てを取り除いておかねば……」

由梨亜は耀太の言葉を扉の陰で聞いていたが、それを聞き遂げると足音もなく立ち去った。

千紗は、由梨亜が帰った後、すぐに日記帳の中身を見た。

「へえ」。由梨亜のお父さん、シャリート国から帰ってきたんだ。

そつえば、なんか嬉しそうだったよなあ、あの日。えっ……ゆ、

由梨亜……」

千紗は、思わずその文字を絶句して読み返した。

そこには、

『この日記帳を手にしてから、出掛けた時に視線を感じるようになったの。不思議よね。しかも、大勢の人がいても、沢山の車が走ってても、そこだけが視えないかのように、存在しないように、一人が余裕を持って立てるくらいの幅の空間が空いているの。その一瞬後には人や車が通ってその空間は埋まるんだけど……ま、気にし過ぎなのかもね。やっぱりこれ、どうしても先輩の悪戯としか思えないんだもの』

と書いてあった。

それに、千紗は思わず吹き出していた。

「全く、由梨亜ったら……ま、ほんとに先輩が監視してたら怖いけ

ど。でも……そんなのあり得ないし。やっぱ、気にし過ぎなんだよ、由梨亜」

そう呟きながらも、親友である由梨亜を心配しているのだろうか、千紗の顔にはあまり笑顔がなかった。

翌日、由梨亜は千紗の家に、勉強道具を抱えて行った。

一緒に宿題を片付ける為だ。

その途中、昨日のことを思い出した由梨亜は、申し訳なさそうに言った。

「千紗、ごめんなさい。お父様から、千紗以外は駄目って……」

「何で！ あたしがいいなら、他の人もいいはずじゃあ……」

「それが、大勢の庶民を屋敷に招待するのは、前代未聞の珍事。過去には、庶民の友人を招いたこともあったから千紗はいいけど、他の人を招いたなんてことはない。いくら年上とはいえ、身分を考えれば、私の方が上。本来ならば、貴族である私が敬語を使われる立場であって、庶民に敬語を使うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけて……お父様が」

「そっか。じゃあ、しょうがないよね……。でもさあ、由梨亜。何でこうなのかなあ。今のこの世の中、身分制度でガチガチに凝り固められて、階級重視じゃん。何も由梨亜を批判するわけでもないけどさ、お嬢様は幼稚園からずっと、あたし達庶民が通えないようなお嬢様学校に通ってるでしょ？ ホテルも、あたし達は一流な物なんていくらお金を出しても泊まれないし、二流の物はお金持ちの倍取られるし。貴族の人に遠慮して、庶民を近くに寄せないようにしているのかも知れないけど……でも、ここまで差が激しいと嫌になるよ」

「でも、昔から……そう、約四千年近く前の昔から、この制度は続いているのよ。その頃はもっと格差は大きかったけれど、今とはあ

んまり変わらないわね」

由梨亜はそう、溜息をつきながら言ったが、千紗の可笑しな様子に、首を傾げた。

「……………」

「千紗？」

「……………」

「ちよつと、聞ってるの？ 千紗」

「……………」

「ねえ、千紗。千紗ってば！」

「あのさあ。由梨亜」

由梨亜が煩かったのか、それとも珍しく考え込んでいたのか、千紗はようやく口を開いた。

「あたし達って、今日、十三歳の誕生日だよね？」

「あつ……………」

ようやくその事実に気づいた由梨亜は、今までしていた会話が、あまりにも誕生日にそぐわないことだということに、やっと気付いた。

そして千紗は、さっきあんなに長々と現代の格差について熱く語っていたのに気付いて、黙り込んでしまったのだった。

その帰り、千紗は由梨亜に、由梨亜は千紗に、それぞれ青系、赤系で作ったビーズのネックレス、ブレスレットを渡した。

どちらも素晴らしい出来で、手作りの汚さはなく、手作りの良さのみがあった。

そして思わず由梨亜は、

「うわあ。千紗、ありがとう！ 丁度着るドレスが青いんだよね」と言って感激したのだった。

「何言ってるの！ お礼を言うのはあたしの方だよ！ 赤はあたし

の色って言われるし……本当にありがとう！」

お互いに感激しながらも、別れ道に来てしまった。

「それじゃあ、明後日の私の誕生日パーティーで！」

「うん！ また明後日！」

「はい、どうぞ。さっさと食べちゃいなさい」

「いっただっきまゝす！ うわ！ やっぱりお母さんのご飯美味しい！」

「全くもう。千紗つてばお世辞が上手！ ……そういえば、今はもう天国にいるお父さんも、私が作った料理をいつも美味しいって食べてくれたのよね……」

千紗の父は、千紗が五年生の時……つまり、二年前に交通事故で逝ってしまったのだった。

しみりしてしまった空気を払うように、千紗はことさら明るい声で、母親に話しかけた。

「お母さん、よく覚えてるよね。あたしだったら、そんな細かいことまで覚えてらんないよ。……そう言えば、明後日に由梨亜の誕生日パーティーがあるのね。それで呼ばれているんだけど、何着ればいいかな？ あたし、そんな余所行きの物、大して持ってないんだけど……」

「うゝん……そうねえ、私が前着ていた、薄い赤紫色のドレスは？ それに千紗。『そんな細かいこと』とは聞き捨てならないわ。貴女、初恋もまだなんだからそんなこと言えるのよ」

目を不気味にキラッと光らせながら言う母親に、千紗は苦笑しながら言った。

「こつちこそ、『初恋もまだ』とは聞き捨てならないよ。初恋ぐらい経験済み！ そんな、ドレスって、あのドレスのこと？ 濃い目の赤紫色で蔓草模様が刺繍されてるの。あれちよっと大人びてるよ

ねえ」

「――それはそうと、そう言えば千紗、夏休みの宿題は？」

いきなりの母親の話題転換に、千紗は反応が遅れてしまった。

「……………え、えつとお。それはあ……………そのお……………」

「つて、いうことは、まだ、全然手を付けてないわね？」

「ぜ、全然じゃあないんだけどお……………さっきも由梨亜とちよつとやつたしい……………」

「千紗！ 下らないこと喋ってないで早く片付けなさい！ さもないと……………」

「……………さもないと？」

千紗は上目遣いに、そつと母の様子を窺った。

「宿題持つて学校に行かせるわよ！ 丁度先生がいて、片付けるのがさぞ楽でしょうねえ？」

その、あまりにも恐ろしい言葉とにつこり笑った笑顔……………。

思わず千紗は身震いしてしまった。

「はい、はい！ すぐ片付けます！」

そう言うのと、千紗は急いでご飯を掻っ込み、部屋へと走っていった。

それを聞いていた母は、思わずクスツと笑ってしまった。

「あの子は私に遣された、たった一人の娘……………。大事に育てなくっちゃね……………」

つい、そんなことを呟いていた母は、部屋から聞こえる声に、思わず破顔してした。

「あつれ。夏休みの宿題どこ置いたつれ？ えーっ。ない！」

その声が聞こえてくると、千紗の母親は、リビングのテーブルの片隅にその宿題があるのを発見し、ぷつと吹き出して言った。

「千紗！ 宿題ここにあるわよ！」

「えーっ！ うっそ！」

ドタバタと、凄い勢いで部屋から出て来た千紗に、母は思わず笑ってしまった。

「全くもう、千紗ったら」
母親はくすくすと笑うと、千紗に宿題を手渡した。

第二章「誕生日パーティー」―1（前書き）

今回、途中でかなり差別的な発言や、敬意が全くないような発言が出て来ます。そういう物が苦手な方は、ご注意ください。

第二章「誕生日パーティー」――1

八月十八日月曜日の午後三時、由梨亜ゆりあの誕生日パーティーが、本条家じょうけ本宅にて行われた。

だが、由梨亜はまだ子供なので午後三時から午後八時までの五時間だけだった。

由梨亜の家の門の前に行くと、本条家に仕えている、黒い、揃いのスーツを着た男性達と、薄手の白の長袖、踝丈の清楚な感じのするドレスを着て、髪をこれまた白いレースのリボンで高めの位置に一つ結びに結んだ女性達が、それぞれの招待状を一枚一枚確認していた。

千紗ちさは、緊張しながら、招待状を渡した。

それは、千紗が今まで見たことがない立派な模様と本条家の印章が綺麗に印刷してあり、門にいた召し使い達は、実に丁寧な態度で招待状と、目の前に置いてある端末機で招待状を出した人の名前が載っているリストを確認し（これは偽の招待状を使って潜り込まれないようにする為と、誰が来てくれたのかを確認する為である）、中の大広間まで案内してくれた。

千紗は、由梨亜の家には何度も行ったことはあったが、そのほとんどが由梨亜の部屋がある棟にしか入ったことがなく、おまけにこの大広間がある棟は由梨亜の部屋があるのとは別の離れている棟にあったのでこの大広間に入ったのは初めてだった。

そして、この大広間はとても広く、千紗の家が二つ入ってもまだまだ余裕がありそうだった。

天井はとても高く、三階までの吹き抜けになっており、大きな、本物のシャンデリアがいくつも輝いている。

庭から見ても一階部分の左半分はダンスフロアに、右半分は立食が
できたり座って食べたりできるようになっている。

そして一階から三階に掛けて、吹き抜けになっている。

庭と二階、三階はテーブルやベンチがあり、食べたり話したりが
できるようになっていた。

千紗は感嘆すると同時に、周りの様子を観察した。

やはり、千紗の年頃と同じような子供はいるが、少女達は千紗の
何倍も立派で真新しいドレスを着て、しかも全員一箇所に集まり、
談笑をしながら千紗や少年達を……特に、自分達よりもみすばらし
い格好をした千紗の方を、無遠慮にジロジロと眺めていた。

少年達は何人かずつ固まり、談笑しながら少女達の集団をチラチ
ラ見ていて、千紗のことは虫けらほどにも気を留めていなかった。

まあ、その反応は、千紗にとっては気楽なことだったが。

大人達は男同士、女同士で固まり、談笑していたり、その固まり
から抜け、ダンスの申し込みをしていたりしていた。

しかし、千紗がいくら見渡しても、人混みの中に目を凝らしても、
由梨亜の姿はない。

時間は、もう三時三十分になろうとしている。

（こういう風に時間が過ぎてから主役登場なのが、上流階級風なの
かな……）

と、千紗は思いながら、到って大人しく、静かに待っていた。

「由梨亜お嬢様、準備はお済みですか？」

すずな 鈴南の声が、由梨亜の部屋の前で聞こえる。

由梨亜は、ドレスの着付けを

「たまにはいいじゃないのよ。ほつといて。それに、こういうこと
も今のうちに経験しておいた方が将来困らないと思うし。だから、
ねっ、自分でやるから」

と、理屈になっているのかなっていいのかよく分からない理屈（我儘とも言う）をこね、言い張り、その勢いに反論できずに固まってしまった召し使い達を尻目に、部屋にドレスと靴を持ち込んでしまった拳句、内側から施錠してしまったのだった。

「由梨亜様、髪を結わなくてはなりませんから、お早く……」

「うるさいわねえ、鈴南。まだ三時じゃないの。終わったから、扉の前を退いて頂戴」

「はい」

鈴南はそう言って下がり、それを部屋の中から確認した由梨亜は、扉を開け放した。

そこには、この前本条紳士淑女高級店で買った、裾が南国の海の海底が一段と深くなった所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーションの長袖・膝下丈の絹地のドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメル靴を身にまとい、そこに千紗のプレゼントした青系のビーズで作ったネックレス・ブレスレットを付けた由梨亜の姿があった。

ネックレス・ブレスレットは、グラデーションだけの無地のドレスを邪魔せず、すっきりと収まって、由梨亜の若さ、まだ幼いからの独特の美しさ、大人びた気品を矛盾せず、それどころか強調して放っていた。

鈴南は、その勢いに吞まれたかのように見えたが、由梨亜のつけているネックレス、ブレスレットに目を留めると

「それは……？」

と、問いかけてきた。

「千紗がプレゼントしてくれたの」

と、由梨亜は茶目つ気たつぷりに、悪戯っぽく答え、その答えに思わず絶句し、彫像のように固まってしまった鈴南を、その場に置いて立ち去り、本来ならそこで着付けをするはずの部屋へと向かった。

そして、魂がどこかに飛んでいったような鈴南は、二、三秒後慌

ててその後を追った。

由梨亜がその部屋へ着いたのが三時五分だったが、髪をセットし、メイクを終えたのが三時四十五分だった。

鏡に映った由梨亜は、普段は少しフワフワと波打っている髪を真っ直ぐにし、毛先をクルクルと巻いて、それを首の少し上辺りで留め、その先を右肩の方へ垂らしていた。

その髪留めは、この前の買い物で買ってきた物だった。

顔は、睫毛にはマスカラを塗り、唇はほんのりと紅く染まり、目の上は薄い水色で彩られ、美しい美少女に……しかも、余所行きの格好をした大金持ちの家の令嬢となっていた。

いや、普通なら、この格好が普通なのだ。

由梨亜がお嬢様離れしていて、いつも庶民のような格好をしているだけなのだから。

「さあ、お嬢様」

と、促され、由梨亜は部屋を出て耀太^{ようた}、瑠璃^{るり}と合流し、大広間へと向かった。

千紗は、大広間で由梨亜がくるのを待っていた。

そこへ、

「その貴女。ちょっといいかしら？」

と、いかにも上品な声が掛かった。

「何ですか？」

と、千紗が振り返って言うと、そこにはさっきこちらをジロジロと眺めていた少女達の集団があった。

「ちよつと、伺いたいことがあります……お時間、宜しくて？」

「ええ、いいです」

「それでは、少し庭で……」

そう言うと、少女達は千紗をあまり目立たない庭の片隅へと連れ

て行つた。

そして、千紗を片隅に押しやり、少女達は腕を組んで一列の半円形になり、千紗が逃げられないように閉じ込めた。

「お前、私達のような上流階級ではないでしょう？」

と、先程大広間で千紗に声を掛けてきた、一番年上の、少女達のリーダー格だと思われる少女が、氷のように冷やかな声で千紗に話しかけた。

その言葉には、先程のような、美しい、丁寧な響きはなく、侮蔑や軽蔑するような響きが含まれていた。

「ええ、そうよ」

千紗は多勢に無勢な状況を、聞く人に全く思わせないような言い方で、身分の高い人にとっては不遜に、そして挑発するかのようになり、相手の顔を、顎を上げ、胸を張って答えた。

「あたしは、確かに貴女達に言わせればただの一般庶民、中流階級よ。親戚がそういうのになつたっていう人も、一人もいないわ。でも……それでも、あたしと由梨亜は親友よ。だから何だって言うの？ 何が悪いって言うの？ 身分の違いが、何よ。一体何になるって言うの？ この日本州を治めておられる天皇陛下だって、貧しく、それ故に泥棒をしたりして、地に這いつくばり、その日を生き永らえている人だって、みんな同じ人間よ！ 同じようにお母さんのお腹で育ち、母子共に痛い思いをして産まれて来た、人の子よ！ 気が合えば、友達にだって……いいえ、親友にだってなれる！ だって、同じ人間よ。そんなの当たり前過ぎるほど当たり前なことじゃない！ だからあたしと由梨亜が親友になつて、なにが悪いと言うのよ！ 悪いと思うなら、その理由をあたしが納得するまで述べなさいっ！」

千紗は色々と溜まっていたので、つい途中から声を荒げてしまった。

だから、すさまじい気迫で少女達に啖呵を切った千紗は、その気迫に少女達が飲まれたことを感じ、形成が逆転したことを確信した。

しかし、それは早計に過ぎなかったようだ。

先程の少女達のリーダー格だと思われる少女が自分を取り戻して、睨みつけながら言い返してきたのだから。

「んまあ、なんて汚らしいことを！ あんな野獣以下の下等生物と神にも等しい天皇陛下を同列に並べるだなんて！ 天皇陛下とそのご家族ご一族は神よ。神の子よ！ そして降嫁なされた天皇陛下の姫君とそのご家族、そして私達何代も続く貴族……そう、大商人や上流階級と呼ばれる一族が人間。そういう者だけが人間と呼ばれるのに値するのよ。残念ながら地球連邦の総人口の半分にも満たないのだけれどね。そしてお前達、一般庶民、中流階級と呼ばれる、この地球上に最も多くいる生き物達は半人よ。私達人間と下等生物達との中間。ありがたく思いなさいな。下等生物とも、野獣とも言われても仕方のない生き物を、『半人』と呼んであげているんだから。そして、お前がさつき言った最下層……あの下等生物達は野獣や溝鼠、そして泥よ。生き物ですらないわ。人間がそういった『物』と親しむのは、言語道断。今からでも遅くはないわ。お前と由梨亜様を今後一切近づけやしないんだから！ さあ、地に這いつくばり額を擦りつけて、許しを、私達の慈悲を請いなさい！ そうすれば、私達は人間ですから、考えてあげなくもないわ。あら、それとも……」

と、その少女は含み笑いをし、軽蔑しきった口調で言い放った。

「『半人』ですから……言葉も通じませんか？ 私達人間の上品な言葉は。ねえ、皆さん」

少女はそう言うとお上品に笑い、周りの少女達もそれに同調し千紗のことをなじりまくった。

「ほくらほら。早く謝らないの？」

「さあ、早く頭を下げなさい」

「いえいえ、土下座にすべきよ」

「そうそう。それでは、そのドレスを土で汚しなさい」

「そうね。それにそんな時代遅れのドレスなんて、もう既に汚れま

みれになっ ていますわ」

「それならば、もう少し汚れても、文句はいえませんか？」

「いいえ、それだけでは何か物足りませんわ」

「そうね。それだけでは足りませんから、額と顔を泥で汚すことにしましょう。ねえ、皆さん？」

「そうよ。異存はありませんよね、この『半人』っ」

「いいえ、半人とは、ちよつと……いいえ、大分美化し過ぎではないかしら？」

「ええ、そうですわ。これは奴隷よ」

「それに、奴隷は人間ではないわね」

「私達に使役される為に生まれてきた『物』よ」

「人権もないわ」

「口答えも許されなかつたわよね？」

「侮辱も、許されなかつたはずよ」

「直接手を触れることも許されないわ」

「私達『人間』の顔をまともに見詰めるなんて、生き恥もいい所ね」

「お前の本当に従順な先祖と比べたら、その先祖が泣くわ」

「それに、天皇陛下とそのご一族のことを口にする時は、地に跪き、額を擦り付け一言『自分のような「物」が貴方様方の御名を口にすることをお許し下さいませ。どうかご慈悲を』と言わなければいけないのでは？」

「ああ、それと最上級の敬語を使わなければならなかつたのではないかしら」

「それどころか、奴隷なんかは、滅多に声を出してはいけないはずよ」

「なら、この奴隷は、奴隷に認められている生存権違反を次々に犯しているわ」

「それなら、直ぐ様この奴隷を躰けなければね」

「感謝しなさい。公共機関に言い付けしないで、私達の手でやるんだから」

「ええ。それと、後で本条家の方々や私達のお父様やお母様にも言い付けなければね」

「それでは話がまとまった所で、その『物』、さつさとおやりなさいな」

「お前には、拒否権などと言う権利は……それどころか、生存権に定められている、『生きる』という権利以外は何の権利も持たないのよ」

「さあ、さつさとやりなさい。私達、そんなに長時間待てませんわよ」

「あら、ひよつとして、もしかすると……」

「本当の本当に、上品な人間の言葉が、お前みたいな奴隷には、通じないのかしら？」

以上、ほとんどの少女達の、千紗に対する侮辱であつた。

そのことに気分を良くしたのか、少女達は勝ち誇り、驕り高ぶつたように笑う。

そんな中、少女達の満足そうな、こちらを蔑む顔に囲まれた千紗の頭のどこかがブツツと音を立てて切れた。

「はあ？ あんた達、何言つてんの？ 気は確かですか？」

千紗は到つて穏やかに、それでいてどこかふざけているように聞こえる声で、言い放った。

千紗は、激情したり興奮したりした時は、先程のようにはつきりきつぱり言い放ち、見事に啖呵を切りまくるが、完全に切れてしまつと、ふざけたように、静かに、穏やかに、それでいて言葉の一言一句にすら、実に丹念に丹念に猛毒を仕込んだ毒針を地肌が見えなくなるぐらいにまでまぶし、それを伝えたいと思う人のみに、真冬の北極と南極を足して二で割らないぐらい冷たく、心を凍らせるように響く。

それでいて、関係ない人には全くそのようには聞こえない。

凄いの一言しか……出てこない。

「全く何を言つてるのかしらねえこの人達は。ほんつとくに全く意

味が解らないわ。あたしと由梨亜が、由梨亜の両親召し使い共々二年前に完全公認の親友だとも知らないでねえ。あんたらって、そんな頭もない産まれたての小鳥かしら？ それともミジンコ？ ミカヅキモ？ アメーバ？ アオミドロ？ ゾウリムシ？ ヤコウチユウ？」

千紗は、小学校の理科で習った微生物の名前を次々に挙げていったが、少女達は眉を顰めた。

「な、何よそれ。この世に存在しない、ありもしない想像上の名前を挙げて欲しくないわ」

勇気を取り戻した少女のうちの、千紗と同じ年の少女がそう言ったが、千紗は皮肉たつぷりにニコニコ笑いながら言った。

「あゝら。何言ってるの？ この微生物の名前を知らない訳？ おつかしいわねえ。あゝあ……あんた達は受験しなくてもいいし、そのまま黙ってても将来は保証されそうなんだけどねえ……最低限、義務教育の中で習った内容は覚えていて欲しいわねえ。それに、この微生物の種類を学ぶことは必修科目だったし……。ミカヅキモ、ゾウリムシ、ヤコウチュウ、アオミドロの名前を知らないのは、まあ、馬鹿過ぎだからしょうがないとしても、よ？ ミジンコとアメーバの名前ぐらいなら、ちよつと賢い幼稚園児でも知っていそうだけどなあ？ ああ、それとも今あたしが言ったように微生物程度の頭脳しか持ち合わせていない訳？ それとも、右から聞いたことが左へ抜けて行く竹輪耳？ 三歩歩けば忘れる鶏？」

「この……！」

と、少女達が気色ばんで大声をあげようとした時、絶妙のタイミングで、その気を挫くように、後ろから声が掛かった。

「お嬢様方、どうかなされましたか？」

皆が振り返ると、そこには本条家の、それなりに高い地位で仕えているらしい、召し使いの中でも立派な服装をした男性が立っていた。

少女達は、千紗の、皇族と貴族を卑下する、あまりにも傍若無人

な態度を告げ口しようと思ったが、生憎相手の名前が分からない。

もし自分の家や、自分と同じ階級、または自分より格下の家で使えている召し使いで名前が分からなくても、

「その貴方」

などと、呼びかければいい。

だが、本条家は地球連邦の上流階級のなかではトップクラスである。

様々な分野で活躍し、辺境に当たる地球連邦なものにも拘らず、地球連邦初の他星に支店を出店したほどで、だからといってお金儲けにしか目がない悪徳商売人ではなく、そうやって稼いだお金を地震などの天変地異や自然災害があつた所に全く惜しげもなく送り、世界中にいる貧しい人達の為に医療物資や食料、学業用品を送り、様々なことに寄付をしている。

極め付けが、何十代も続く大貴族である。

なので召し使いとはいえ、本条家に仕えている以上、ただ『貴方』と、軽々しく呼べないのだ。

そういう理由があり躊躇っていた少女の間をすり抜け、千紗はその人の下へと歩み寄った。

そして、千紗は何と、半ベソをかきながら、その人に訴えたのだった。

「坂本さん。あの人たちが、何だか分からないんですけど、何かあたしに身に覚えのないことを責められているんです……」

それを聞いた少女達は呆れ返ってしまった。

（あんなに私達を侮辱しておいて、その白々しさは一体何！）

と、全員が思った。

本気で呆れ返った。

しかし、そんなことは知らない坂本は、こう慰めた。

「千紗さん、大丈夫ですよ。貴女は分からないと思いますが、彼女達には、彼女達なりの誇りという物があるのですよ」

「そうなんでしょうか？」

それで少女達はようやく千紗の名前を知ったが、それどころではなかった。

何故かと言えば、千紗はうつすらと涙ぐんでいるだけではなく、声まで涙声になってしまっているのだ。

少女達は、あまりのことに、今度は膝がヘナヘナと崩れ、土にのめり込みそうになるのを堪えなくてはならなかった。

さすがにそれだけは、貴族の誇りに賭けてもできない。

そしてこんな腹芸は、今の自分にはできそうにない、と本気で思った。

また、何故一般庶民がこんな技を持っているのか、真剣に考え込んでしまった。

身分の上下に拘らず、商売をやっていたり政界に身を置いていたりする人間は、思ってもいないことや、物事を有利に運ぶ為の駆け引きを口にする……つまり、腹芸が重要となる。

なので、ある程度は子供のうちからできるし、やらなければならぬことだが、今の千紗のように堂々と口論し、啖呵を切り、相手を窮地に追い込みながらもその仕上げとして、召し使いとはいえ、見知っているとはいえ、事情を知らない相手に涙ながらに縋りつき、それを覚られずに丸ごと信じさせるなんてことは、まだ幼い彼女らには到底無理な話である。

それどころか、そんなことができる大人もあまりいない。

しかし、二度目になるが、本当に何も知らない坂本は、少女達を追い立てた。

「そうです。さあ皆さん。由梨亜様が来られますよ」

「はい。分かりましたわ」

そういうと、何とか持ち直した少女達はツンとすまして、千紗を睨みつけながら、部屋に戻っていった。

第二章「誕生日パーティー」―2

庭から見て、ダンスフロアの一番左端は、幅が十メートルほどある階段がどっしりと構えている。

そして、その階段を上って曲がると、それぞれ五メートルほどの幅の通路があり、その使用法は先程も述べた通り、食べたり話したりする場所である。

二階の食事スペースの奥には両開きの扉があり、そこから屋敷の中に入りができるようになっていた。

三階は、大きい階段や扉がないことを除けば、二階とほぼ同じだった。

千紗が、
(由梨亜はあそこからくるのかなあ……)

と、待っていたら、階段の横に司会者が立った。

(いよいよ始まるんだ……)

と思いながら時計を見ると、丁度四時になる所だ。

(上流階級つてのは……)

千紗は頭が痛くなるような思いをしたが、何とかそれを堪え司会者の言葉を聞くことにした。

『長らくお待たせ致しまして、申し訳ございませんでした』

千紗はこれを聞き、確信した。

このように待たせるのが普通なのだと。

一般的に考えれば、やっぱり時間が掛かったのかな、と思う所だが、千紗は声の響きから、ただの社交辞令に過ぎないと分かった。

『ただ今より、本条由梨亜様の誕生日パーティーを開催致します。』
本日は八時までと、大変短い時間ですが、皆様、どうぞお楽しみください。それでは、本日の主役、由梨亜様とそこご家族が入場されますー！』

会場にいた全員は、ぱつと後ろを向いた。

そして、二人の召し使いにより、二階の両開きのドアが開けられ、そこから由梨亜と両親が入ってきた。

会場にいた者は皆、由梨亜の姿を、まるで光の妖精、海の精霊のようだと思った。

何故なら、由梨亜が身に纏っていたのは、まだ中学生という幼さにぴったりの無地のドレスだが、だからこそ放てる威厳という物があつたので、下にいた者達は固唾を呑んで見ているしかなかった。

扉から出てくると、三人は左側の通路を通り、階段で三人並んで下に下りてきた。

下に着くと、司会者は

『皆様、これからパーティーを始めますが、その前に、本日の主役、由梨亜様からご挨拶があります。それでは由梨亜様、お願い致します』

と言い、由梨亜に簡易拡声器を渡した。

『皆様、本日は私の誕生日パーティーにご出席戴きありがとうございます。本日は私の年齢のこともあり時間は短めとなりますが、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい』

由梨亜はそう言い、完璧なまでに見事に貴族の令嬢に相応しい礼儀正しいお辞儀をして、父母の所へ行った。

『えー、皆様。本日の主役は由梨亜様でございますが、由梨亜様はまだ婚約者がおられませんので、本日は由梨亜様のご両親、本条ご夫妻が最初に踊られます』

そこで、^{ようた}耀太と^{るり}瑠璃はお辞儀をして前に進み出た。

ダンスフロアの一階部分の壁は、一面は階段に、もう一面は庭に通じるガラス扉となっていたが、更にもう一面は紅色の垂れ幕に覆われ、こちら側からでは見えなくなっていた。

千紗は今までそこには一体何があるのだろうか、と考えていたが、その時に謎は解けた。

そこには最低で五十人、最高で百人ほどの楽人が控えて、と言うよりは、いつでも楽器を弾いたり吹いたりできるような体勢で待つ

ていた。

そして、指揮者が指揮棒をあげ、ワルツを弾き始めた。全員が見守る中、二人は見惚れてしまうほど優雅に一曲踊り、お辞儀をした。

拍手が一斉に沸き起こって、司会者は律儀に待っていたが、一分ほど経った所で、このままでは時間がずれまくって仕方がないと思ったのか、召し使いとしては失礼ながらも、拍手の途中で拡声器を使って大声を張り上げた。

『えー、皆様！ お静かに！ お静かに願います！ 皆様！！』

そして、ようやく静まった所で、司会者は司会の仕事を再開した。『皆様。ただ今、グラスをお配りしておりますので、少々お待ち下さい』

この言葉に千紗が失礼にならない程度に辺りを見回すと、カートを押している召し使い達が、大人にはシャンパンを、未成年やお酒の飲めない人にはジュースを配っていた。

『お飲み物が皆様の手に渡られたら乾杯を致します。それが終わられたら七時半まで自由でございます。楽人達は、基本的にずっと演奏を続けておりますので踊られていても構いませんし、皆様が今おられる所の後ろや二階や三階、お庭などで飲食をなさってもかまいません。しかし、七時半までにはここに今のようにお集まり下さい』

司会者がそうして話している間に、全ての人にグラスが渡った。

『それでは、皆さんにグラスが渡ったようですね。それでは、由梨亜様、お願い致します』

由梨亜が前に出て、左手に司会者から手渡された簡易拡声器、右手にグラスを持つと乾杯の音頭をとった。

『皆様、今宵は十分に楽しんで下さい。乾杯！』

「乾杯！」

と、皆が復唱し、一斉に飲み物を飲み干した。

そこから、空気は一気に砕けた物になり、それぞれ談笑しながら、食べ物を食べたり、ダンスフロアに出て行ったりした。

楽人達は、先程とは全員入れ替わり、ワルツを演奏し始めた。

千紗は、乾杯が終わってからすぐ由梨亜の元へと向かおうとしたが、先程の少女達がそうさせなかった。

「生意気よ」

と、小声で言うのと、さりげなく数人ずつ固まって散らばり、千紗が由梨亜の元に向かうのを阻止したのだった。

千紗は、そのせいだけではなかったが、由梨亜の元に向かうことを諦めざるを得なかった。

何故なら、少年達三十人のうち五人が由梨亜にダンスの申し込みをしていたからだ。

残りの二十五人は、そこら中に散らばった少女達を値踏みし、ダンスの申し込みをしていた。

ちなみに言うと、千紗にその目を向ける少年はただの一人もいなかった。

千紗は食事が並べてある所に行くと、食べ物がある程度取り、庭に行って食べ始めた。

千紗は、なるべくゆっくりと食事を摂り、一番建物から離れて座って、しかも二、三回ほどお替りまでしたが、五時半頃にはもう全て食べ終わり、お腹も一杯になってしまった。

そこで、仕様がなから、中に入って優雅な貴族のダンスでも眺めていようと中へ入った。

そして、ふと

（由梨亜って、まだ踊ってるのかな……？）

と思い、踊っている人の合間を縫って視線を巡らすと由梨亜がまだ踊っているのが見えた。

だが、相手の少年は先程の五人ではない。

一曲踊る分と、パートナーを変えたり、楽人が変わったりする為に曲の間に空く時間が、合計でおよそ十分は掛かることを考えると、時間的に見て今はだいたい九曲目なのだから、九人目となる。

千紗には由梨亜のニコニコとした笑顔が見えたが、その笑顔は他

の人が見れば普通にニコニコ笑っているなあと思うかもしれないが、千紗には由梨亜が疲れているのが見て取れた。

（由梨亜、よくそんなにできるなあ……）

と、思いながら、由梨亜が踊るのを眺めていた。

曲が終わると、由梨亜は相手と別れたが、また次の相手が来て踊った。

（由梨亜の相手をするぐらいの人が、このパーティーに最低十人……）

千紗はそう思うと目眩がしてきた。

本条家は上流階級の中ではトップクラス。

本条家とほぼ同等の上流階級の家はそれなりにあるが、敵対する家を除くとその半分以上になる。

その中でも、由梨亜と釣り合う年齢の子息がいるのは、更に半分……。

それに、いくら初めてとは言え、一人娘とは言え、このパーティーは『本条家の一人娘、本条由梨亜の誕生日パーティー』である。

なので、そんなに招いた、由梨亜の父、本条グループの再頂点に立つ本条耀太に対する思いが、感心を通り越して、呆れた物に変わってしまった。

由梨亜が踊るのは見ていて飽きず、飲み物を飲みながら一時間ほど見続けてしまった。

そして十五人目と踊り終わった後、ようやく由梨亜はダンスの相手から解放された。

そして、千紗は今度こそ由梨亜の所へ行った。

今回は、邪魔する少女達はみんな踊ってしまっていて、邪魔ができなかった。

ちなみに、その少女達は自分に申し込んで来た少年達と踊っている、

「しまった！」

と、思い、すぐに駆け寄って間に割って入れないことを悔やんだ

のだ。

「由梨亜！」

千紗は、由梨亜が解放されるとすぐに呼びかけた。

由梨亜もすぐに気付いて、

「千紗！」

と、返した。

「由梨亜……大丈夫？」

と、千紗は思わず声をかけてしまった。

何故なら由梨亜はとても疲れ切っていて、見ているほうが疲れるような様子だったからだ。

「もう駄目、絶対に踊れないわ。十五人と踊ったんだもの。これ以上踊れて言われたって脚が疲れていて無理だし、お腹もペコペコよ。絶対に踊らなきゃいけない義理や縁のある人とはもう踊り終わったし、これ以上申し込まれても断れるし私自身断る気にいるからもう大丈夫！ 後はゆっくり休めるのよ！」

「じゃあ、お庭で夕ご飯食べなよ！ あたしはもう食べ終わっちゃったから飲み物でも飲んでさ！ 丁度いい穴場があるんだ。あんまり周りから見えないから、内緒話とかするのにすっごい丁度いいの！」

「そうなんだ。じゃあ、そこで食べたり飲んだりしよっか」

そして、由梨亜は一人で食べ切れるのかと思うほど沢山食べ物盛った二皿のお皿が乗ったカート、千紗は大きめのコップを二つに更に大きな入れ物に入った飲み物が二本乗ったカートを押して、千紗の言った穴場——つまり、千紗が食事をした所に向かった。

そして、食事をしながら、他愛のない話をしていた。

つまり、こんなに大きなパーティーを開くと一体どれくらいお金が掛かるのだろうとか。

こんなに人が来ていたら、顔も名前も覚えていられないとか。

夏休みの宿題が、どれくらい終わったとか。

部活のこととか。

この前やった、百怪談で見つけた、何の変哲もない日記帳のこととか。

そして、由梨亜が食べ終わると、千紗は本題に入った。

「由梨亜、あのね、ここに招待された女の子達いるでしょう？ その子達に言われたの。あたしと由梨亜を近付けさせないって」

そして、千紗はさっきの少女達との言い争いの内容をほとんど正確に、しっかりと伝えた。

もしその少女達が千紗の言うことを聞いたら、真っ蒼になって逃げ出すこと間違いなしだろう。

何故なら、第一に由梨亜にそんなことを聞かれたら、今後社交界での彼女達に対する由梨亜の心証が悪くなるだろうし、第二に彼女達は、千紗のようにそこまで正確に会話の内容を復唱することは全くもって必要のないことであるし、実践する機会すらないので、そのこと自体に恐怖を覚えるだろうからである。

そして、それを聞いた由梨亜は、思わず笑ってしまった。

「千紗……い、いくら何でも、て、天皇陛下と、物乞いや奴隷を……同列に、並べるなんて……！ スケール大きい！ そんなの誰も思いつきやしないよ！ さっすが千紗！」

由梨亜は時間を掛けてようやくそこまで言っていると、身体をくの字に曲げ、声を殺して大爆笑した。

「由梨亜……笑うか話すかどっちかにして……」

千紗のそう呆れ返った意見は、千紗にしては珍しくしっかりした物で、周りからの賛成も得られそうだった。

「まあ、でも彼女達も言い過ぎね。半人やら野獣やら下等生物やら。それに、奴隷だなんて……一体何千年前の話よ。今のこの世の中に、奴隷なんている訳ないのにね」

「ん」。でもあたし、あいつらが『奴隷に生存権がある』って言う

たことに驚いたな。だって生存権って、『健康で文化的な最低限の生活を営む権利』でしょ？ あの人達の、その前後の発言とは矛盾してると思うんだけどなあ。それに、人権はないのに生存権はあるって……矛盾の塊じゃない」

「まあ、知らなかったんじゃないかしら。あの人達は無知な貴族の典型例だからねえ。知らなくっても不思議じゃないわ。あの人達、生存権をただの『生きる権利』とでも勘違いしてたんじゃないかしら。でも……」

そういうと、由梨亜はクスツと笑った。

「千紗が切れるなんて……よっぽど頭が悪い上に口も悪いのね。それに、『貴族』という身分でガチガチに固まっている、『偏屈婆あ』の予備軍よ」

そう断言すると、由梨亜はヒソヒソ声で千紗に話した。

「ねえ、千紗。相談したいことがあるの」

由梨亜のさつきとは打って変わって真剣な顔と口調に、千紗も半分笑っていた顔を引き締め、千紗も真剣に問い返した。

「何、由梨亜？」

「あのね……夏休みに入る一ヶ月くらい前、席替えがあつたでしょ？ その時、私の隣の席、藤咲香麻君ふじさきこうまになったの、覚えてる？ それでね、話しかけられた時、笑いかけられた時……。胸が苦しくなつて、ドキドキしたの。ねえ、千紗。これって、一体何？ すっごく、辛くて……」

「由梨亜……」

千紗は、思わず呆れ返ってしまった。

由梨亜が『お嬢様』だということは、千紗も重々承知していたが、ここまでの箱入りだったとは――。

「ねえ、千紗、教えて」

「由梨亜……それはねえ……貴女は香麻君のことが好きなのよ」

「そ、う……なの？」

「由梨亜、初恋してたことないの？ って言うか、たとえ初恋が

まだだったとしても、よ？　そういうの、小説とかドラマとかアニメとか漫画とか……そういうので、知らなかったの？」

千紗は、呆れてしまった。

そして、

（まさか……そんな分かったことを訊くなんて……）

と思い、思わず溜息が出てしまった。

「ええ。まだなの。と、言うよりは、恋って物——好きっていうことが、よく分からないのよ」

「そうなんだ……。ところで、由梨亜」

千紗は、先程の重い溜息とは打って変わって、明るい口調で言った。

「その、あたしがあげたアクセサリー、全部付けててくれたんだあ」
千紗は、感激したように、続けた。

「由梨亜、やっぱりお嬢様だからさ、アクセサリーとかも一杯あるでしょう？　それに、いくらでも気に入った物はバンバン買うことができるし……だから、新しいドレスを買ったとしても、それに合わせてアクセサリーも買ったりすると思ったから、あたしの作ったのなんて、付けないかと思ってたよ。精々が、持って来るくらいでそれに、たとえ付けることがあっても、こういう大きいのでは、絶対に付けないと思ってた。なのに……」

「もっつ！　千紗ったら、馬鹿じゃないの？　折角千紗が私の誕生日の為に、手作りで作ってくれたんだよ？　そんな大事な一生の宝物、私が付けない訳ないじゃない！　それに……」

と言うと、千紗の方を見た。

そして、にっこり笑って言った。

「千紗だって、私が作ったの、付けてくれてるじゃない！」

「それこそ、その言葉そっくり返すよ！」

二人でひとしきり笑った後、七時三十分が近づいてきたので、会場に戻って行ったのだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7986x/>

時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

2011年10月26日07時10分発行